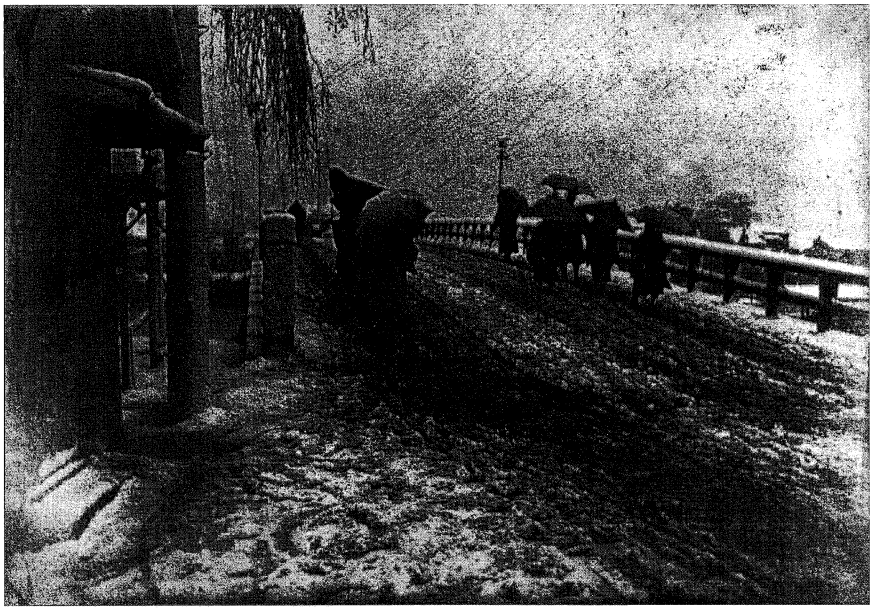
もくじ　柳下写真館の歴史写真　1P　シンポジウム「明治期足立の光と影」3P
江戸六阿弥陀巡拝路　四（終）4P

足立史談
第558号
2014年8月15日
足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
〈25-308〉

柳下写真館の歴史写真

郷土博物館

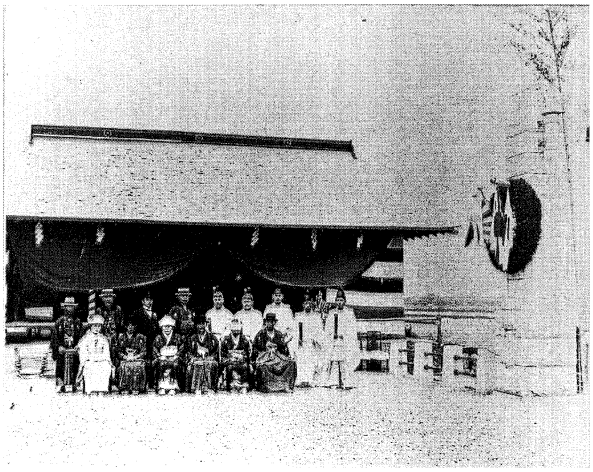


「雪の旧大橋」
足立区名宝展覧会に出品されたと考えられる作品。名宝展覧会出品作品は、このほか、「千住新橋渡橋式」、「明治四三年水害実況」の二点の名前がある。

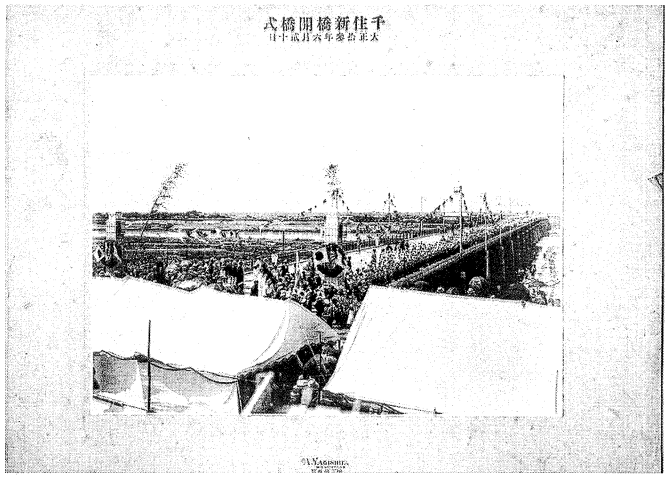
■名宝展と写真　昭和九（一九三四）年八月に千寿第二尋常小学校で足立区名宝展覧会が開催され、旧家の所蔵するさまざまな資料が出展された。このときの出品目録を見ると、柳下写真館の名前で、三点の作品が出品されている。（**写真キャプション参照**）五五八号では柳下写真館とその前身の千柳館について紹介した。このたび、柳下勉氏によって提供された古写真のなかに、名宝展出展目録に関連する作品と考えられるものがあった。これらを紹介しながら、写真に記録された歴史について振り返る。

■大橋風景　まずひとつが「雪の旧大橋」である。記念写真ではなく風景写真で、この時代少ない写真だといえる。人の足跡と荷車の轍により変色して汚れた雪が、かえって美しく静かな情景としてとらえられており芸術的である。テーマ的にも今回初めて紹介される作品である。

■新橋渡り初め　「千住新橋の渡橋式」については、これまで、千住側から西新井側へ行列が進む様子を写したものが知られている（**次頁**）。それと異なり、国旗で飾られた親柱と神社風の建物が写る記念写真（**上**）、さらに渡り初めを行った菅沼家の人々の記念写真（**下**）である。橋の渡り初めには、三世代夫婦を先頭に行う慣習があり、日本髪に揚帽子を被った前列三人の女性とその後の男性が夫婦であろう。三代夫婦は、橋のそばの記念写真でも主役となっている。



新しく提供された「千住新橋渡橋式」関連の写真。三代夫婦を中心とした記念写真である。



渡り初め関係者の記念写真は、名品展出品作品ではないと考えられる。しかし、神社の社殿風の立派な建物の存在など、これまで知られていなかった渡橋式の様子を知ることができる。そして、この建物は仮設なのか、渡橋式後の転用の可能性の有無、さらに三代夫婦を務めた菅沼家についてなど、新たに解明すべき事項を提示することとなった。

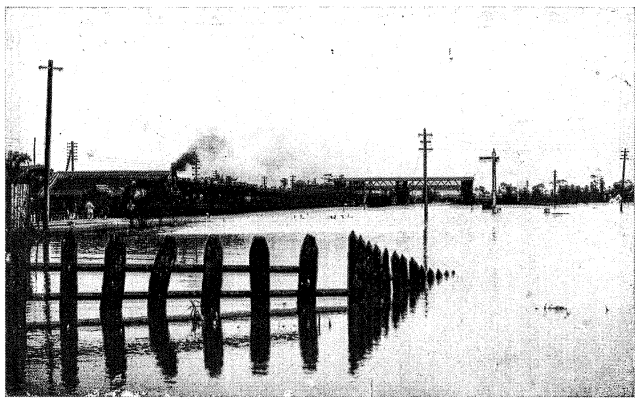
■大洪水と絵葉書　水害の写真は三枚提供され、いずれも明治四三年八月に東京の下町地域に甚大な被害を与えた東京大洪水の様子である。

左にあげた上二枚は、北千住駅の駅舎と、浸水している線路の様子である。拡大すると駅舎には日本鉄道の社章がつけられ、駅前通りの店の街灯には「前林運送店」の名前が見える。三枚目の写真は、郷土博物の所蔵している「千住町中組通り」の絵葉書と同じものであった。撮影場所は、千住仲町三二にあった千柳館（画面左の建物）の前から南側を写している。同様の洪水絵葉書、千柳館発行の銘のある洪水絵葉書は、このほか七種類確認でき、地元の写真館として未曾有の水害の様子をあちこちで記録したことがうかがわれる。

報道手段が限られていた時代には、災害の様子を詳しく伝えるものとして被害の様子が絵葉書化されて販売された。関東大震災の際には、震災三日目には写真を撮るものがあらわれ、七日後には凄惨な状況であった被服廠跡地（ひふくしょうあとち）の絵葉書が発禁になったといい、被災後間をおかず絵葉書が作られている様子がわかる。（「メディアとしての絵葉書」田邊幹『新潟県立歴史博物館研究紀要３号』）

明治四三年の大洪水については、浅草、両国など被害を受けた各地の様子が絵葉書になって多数残されているが、発行者の名はない。千住大橋や北千住駅を撮影したものも数点あるが、これらに名はなく撮影者は不明である。こうした災害絵葉書の発行者はどこなのか、撮影者は誰なのかほとんど明らかではないが、千柳館発行の絵葉書は、地元ならではの視点で撮影されたものと想像できる。七種類すべてをここで紹介できないが、「千住一丁目炊事場の実況」や「千寿小学校」（報知新聞の慰問団が小学校に小舟で向かう様子）など、千住に関係する人には無関心ではいられない被写体もある。ただし、名宝展に出品された写真が、どれかは不明である。

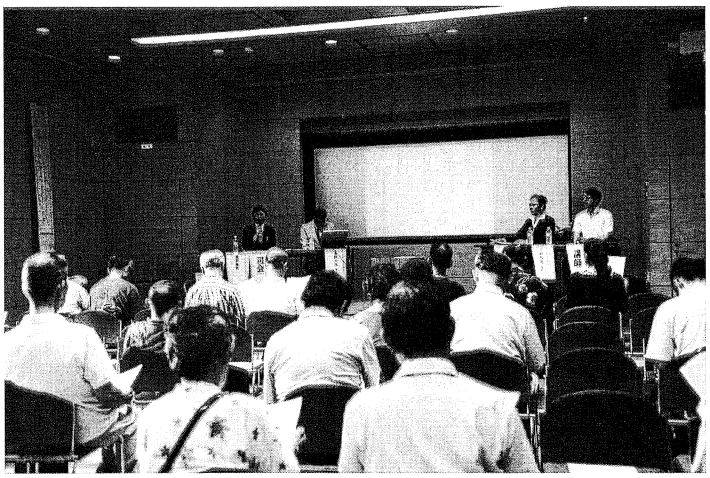
■名宝写真、写真技師でなければ不可能であった技術と、地元ならではの視点でとらえた「郷土の記憶」は、名宝展に出品された古文書資料や美術品と同じように、見る人に感動を与えたであろう。そして、現在も高い史料価値を持っているのである。



（上）北千住駅前通り
（中）浸水した線路と蒸気機関車（北千住）
（下）当館所蔵絵葉書。まったく同じ写真が、今回柳下氏から提供された。

シンポジウム「明治期足立の光と影」報告

郷土博物館



七月二七日(日)、郷土博物館講堂にて、企画展「明治という夢」関連事業のシンポジウムを開催した。

登壇者に、新選組や千葉さな等の研究で著名なあさくらゆう氏（歴史研究家）、明治期の地方名望家の活動等を専門に研究されている三村昌司氏（東京未来大学専任講師）を招き、当館学芸員の多田文夫を交えて、各氏による講話、および会場全体でのディスカッションを行いました。

最初に講話のあらましをご紹介しましょう（各話は十五分で構成）。

＊　＊　＊

■あさくら ゆう氏「幕末の新選組、明治の千葉家」　あさくら氏は動乱の実像や、明治前期の近代化を題材に、ダイナミックに変化する足立の姿を紹介して会場の興味を誘った。まず幕末維新期の千住宿の特徴として、小菅銭座の存在により北町奉行と勘定奉行との接点があったことを紹介した上で、慶応四（一八六八）年の千住宿での官軍と旧幕府軍の対峙による混乱状況が生じた幕末維新期の動きを概観し、明治一〇年代の千住遊郭再興、病院や治療院、灸治院の増加、明治二〇年代に開業する千住馬車鉄道など近代化していく千住の動きについて紹介された。

■三村 昌司氏「千住中組・高尾家からみる明治の名望家」　三村氏は一つの家、千住掃部宿の高尾家を見ることから明治時代を探った。とくに「何らかの社会的行為によって民衆から尊敬や名誉を勝ちえていた者」といわれる「名望家」である高尾家の明治期の社会的活動を明らかにした。近世の千住開発や治水の由緒によって明治期に戸長や水利関係の役職を担った高尾紀吉と、地域の役職に加えて戦争への貢献や政治への関与を深めていく次世代の高尾性之助との間にある、世代間のギャップに着目され、名望家にも役割の変化が見出せることを指摘した。

■多田文夫学芸員「近代足立の文化」　幕末から明治・大正、そして昭和時代にかけて、江戸文化を志向した足立の様子を紹介した。とくに、明治期の足立では祭礼の江戸化、お囃子の広がり、荒川堤の桜、富士講の隆盛、それから千住の名士たちが所蔵する美術作品のなかに、こうした特徴が顕著にみられる点を紹介し、足立の明治時代を考える上で、きわめて重要な視点であるとした。

＊　＊　＊

【ディスカッション】　三名の登壇者の講話の後、会場からの質問をふまえたディスカッションを行いました。会場からは八通の質問用紙が司会のもとへ届きましたが、そのうちの四通は、明治期の足立で江戸文化が志向されていく理由についての質問でした。

この質問に対して、あさくら氏は、千住宿に限って欧米志向の文化的動きもある点について指摘された上で、その反動として江戸文化を志向する動きがみられると述べられました。その要因として武士を中心としておこなわれてきた江戸文化に対して、庶民が抱いていた憧れが、明治期に一気に花開いた可能性があると指摘されました。

また三村氏からは、明治二〇年代以降に社会全体で「天保老人」などと称された江戸時代からの人々と、幕末明治に生まれた世代の人々との交代が背景にあり懐旧の動きがあるのではと、新たな視角を提示されました。

このほか、明治期になると、江戸時代に武士であった人たち（とくに幕臣）が、学校教員として足立の地域社会のなかへと迎えられていく事実が紹介されたり、物流拠点としての千住の役割の高まりが指摘されたりするなど、さらに深い議論がおこなわれました。

最後にフリー議題のディスカッションとなりました。歴史ドラマにおいて、どこまでがフィクションなのか？という質問について話題となり、あさくら氏、三村氏からは、それぞれが見聞きされた体験談や、歴史的事実とドラマの脚本との乖離（かいり）について、様々なエピソードをお話しいただきました。また、当日参加されていた歴史ドラマの考証を担当されている殺陣師の小西真円氏や、千葉周作のご子孫である熊木慶忠氏からもお話しをいただくことができた。

このほかにも興味深い質問がフロアから届けられましたが時間の都合で一部割愛しました。しかし盛況のうちにディスカッションは終了となり、シンポジウムご参加の皆様に紙上より御礼申し上げます。

（郷土博物館専門員　夏目琢史）

江戸六阿弥陀巡拝路 四（終）

本間 孝夫

「六阿弥陀路程略記」・・・

（前号の続き）

〔与楽寺～長福寺（常楽院）〕

夫より東南行、一条の一路を行

この道、日暮里の西、本郷通り之東中の通りなるへし

三さきの大通りニ出、東に転して谷中門に入、黒門より出て

与楽寺より二十五丁

下谷五番メ

長福寺

与楽寺（北区田端一－二五－一）よりは一本道で、開成中高学校の横を通り、三崎坂にでる。この道は上野台地の上を通る道と台地の下の道（谷田川沿いの道）との中間の道である、三崎坂の通りを東に曲り坂を上ると、寛永寺の谷中門にでる。谷中には江戸切絵図でも門がいくつかあり、どこか判らないが現在の東京芸術大学あたりであろう。

上野の山内は自由に通行でき、現在の上野広小路から上野の山に入る所にあった黒門から出て、六阿弥陀第五番目の長福寺に至る。長福の名前が九代将軍家重の幼名が長福丸であったため、それをはばかってのち常楽院に改称された。常楽院の場所は、現在の上野広小路のアブアブ上野店の所にあった。寺は関東大震災で焼失し、不忍池脇の東天紅の場所に移ったが戦災で再度焼失し、調布市つつじが丘に移り現在に至っている。（調布市西つつじヶ丘四－九－一）

東天紅の裏には、常楽院別院としてのお堂があり、阿弥陀仏が祀られている。

（弥陀）みたもうての道すから見所なし、隅田川白ひけよりわたしをこえて千住までの間、風景あるのミ、其余ハ見るへき所々もなし、川も千住の橋より上の方は両畔木かや生しけりたるまてにて、ながめにとまる所々もなし、□（抹消）木余りのみたにて（弥陀）縁起の一帳をうる、この外ニ縁起もなし

村尾正靖は阿弥陀詣の順路全体を、見るべきものがなくただ風景のみと印象を述べているが、柳沢信鴻は「宴遊日記」で「・・沼田むらまで行程三里の間至て退屈するという人あれど、予は田舎の侘し道路の好きなれバ更に倦ず・・」と殿様らしい印象を記している。

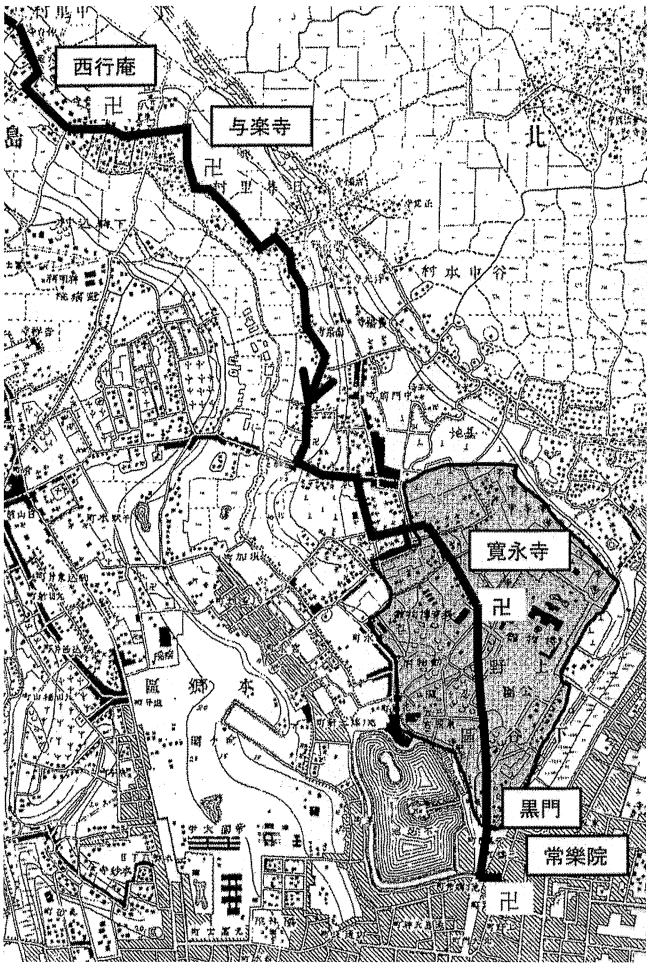
六阿弥陀に関する縁起は性翁寺のみにしかなかった。また一般に、六阿弥陀詣での道筋は参拝者で賑わいを見せ、寺院の堂も大変な混雑で堂上にも上がれず、堂下から拝するなどと言われているが、巡拝記の中には彼岸の中日にもかかわらず「今日甚人稀」と記しているものもある。

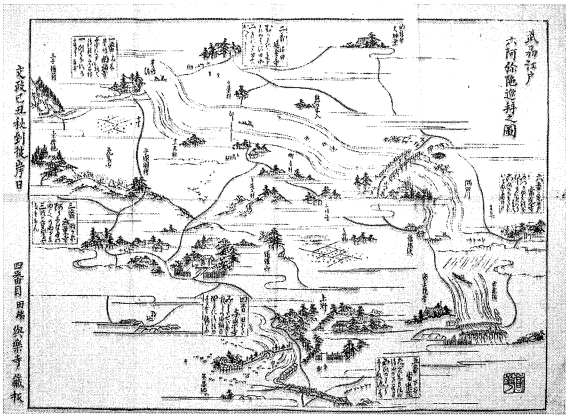
江戸六阿弥陀については、六阿弥陀関係寺院の縁起や史料からの報告が多くなされてきた。私は、今回巡拝路という今までと違った観点から、江戸時代の六阿弥陀詣を調べようと試みた。その結果、当時の足立区や北区周辺が田園地帯でありながら、六阿弥陀寺院が繁昌し、巡拝路の詳細が判り大変面白かった。

ちなみに北区王子に住む友人が村尾正靖とは逆回りに西福寺から歩いて六阿弥陀巡拝をしたが、朝六時にでて帰宅したのが夜六時と、休みを入れて十二時間かかったとのこと。

これから六阿弥陀巡拝を試みようとする人の参考になれば幸いです。

（北区の歴史を学ぶ会）





文政12（1829）年に与楽寺で作られた「武州江戸　六阿弥陀巡拝之図」、こうした地図を手に人々は巡拝した。

＊「縁故疎開で過ごした北鹿浜の思い出」は紙幅の都合により休載しました。

<再生紙を使用しています>